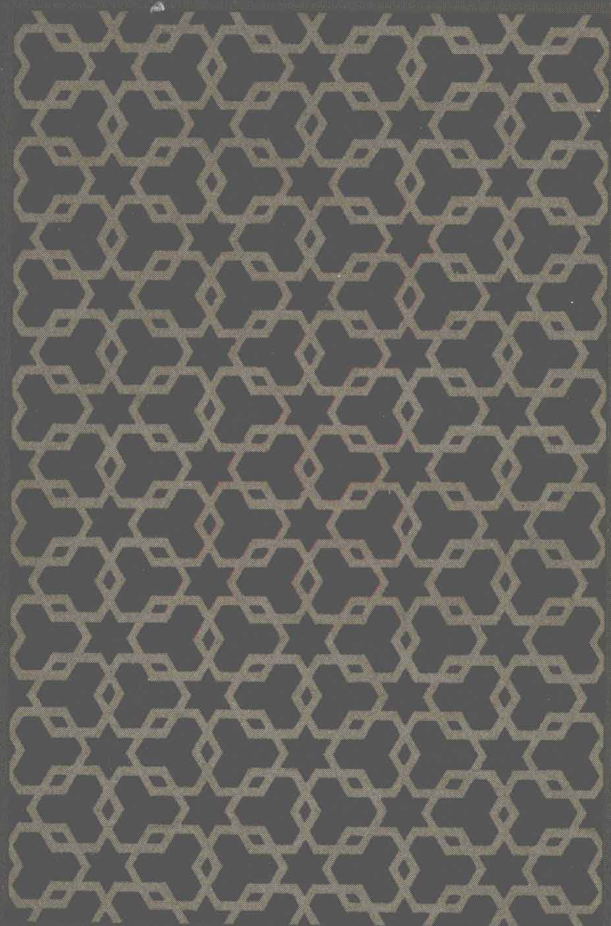


エドガー・アラン・ポオ の世界

罪と夢

水田宗子



著者について

水田宗子（みずた のりこ）

東京女子大学英米文学科卒業。東京都立大学大学院
修士課程在学中イェール大学に留学。イェール大学大
学院米文学修士号、博士号取得。現在、アメリカ南カ
リフォルニア大学比較文学部準教授。

『春の終りに』（詩集、八坂書房、一九七六年）、『幕
間』（詩集、八坂書房、一九八一年）、*Reality and
Fiction in Modern Japanese Literature*（評
論、マクミラン（ロンドン）、M・E・シャープ社（ニ
ューヨーク）一九八〇年）、『鏡の中の錯乱』（シルヴィ
ア・プラス詩選・評論、静地社、一九八一年）などが
ある。

エドガー・アラン・ポオの世界
——罪と夢

一九八二年六月二十五日 一刷発行

定価 二二〇〇円

著者 水田宗子

発行者 南雲克雄

発行所 株式会社 南雲堂

東京都新宿区山吹町二〇一 郵便番号 一六二

電話 東京（K）三三三番／振替口座 東京六〇六六番

印刷所 神谷印刷株式会社

製本 岡本製本所

万一落丁・乱丁本がありましたら、ご面倒ですが、小
社通販係宛て送附下さい。送料小社負担にてお取替え
いたします。

△検印省略△

© 1982 Nan'un-do Publishing Co., Ltd.

Printed in Japan. <1B-124>

3098-310124-5625

エドガー・アラン・ポオ の世界 罪と夢 水田宗子



目次

序章	7
第一章	ポオの自然観 15
第二章	現実の象徴、及び超越の企てとしてのグロテスク 50
第三章	犯罪と“魂の恐怖” 97
第四章	夢見る冒険者 138
第五章	夢の美学 178
注	213
後記	229

装幀 斎藤和雄

エドガー・アラン・ポオの世界
― 罪と夢

序章

グロテスクとアラベスクは、ポオの想像力の本質を形作る重要な美的概念であると同時に、ポオの宇宙観及び人間観の中心的概念でもある。従ってグロテスクとアラベスクは、作品の単なる一要素ではなくて、テーマ、構造、表現様式を総体的に規定するものであり、なかでも、ポオの全作品中に展開され、後に「ユリイカ」の神話にまとめられてゆく詩人のドラマを根本的に規定するものである。本書では、グロテスクとアラベスクという視点から、ポオのドラマに一貫してみられるテーマ——即ち自然及び人間（詩人）の生成と破壊、疎外と回復——を考察し、回復探求に用いられる「グロテスク」な方法の意味とその正当性を検討してゆきたい。

ごく最近まで、ポオの作品は総括的に検討されることは少なかった。今までに実に多くの伝記、作品解釈、影響関係、原典調査等の研究が欧米及び日本のポオ研究者によってなされてきたが、作品批評も有名な代表作にかたよることが多く、作品全体をポオの文芸思想の本質を知るために総体的に見てゆく一貫した視点は、最近に到るまで提出されることはなかった。ポオには創

作活動の初期から強い神話作りへの志向があり、事実、最終的には「ユリイカ」という膨大な宇宙論の中に、自らの生涯と芸術の意味をまとめようと試みた事実を考えてみても、ポオの作品のすべてを貫くテーマ、想像力の質と形態、形而上学的、美学的視点といったものに焦点をあてずに、ポオの作品を正しく解釈、鑑賞することは不可能である。たしかに、ポオの個々の作品は、「ユリイカ」の神話に収斂されるべきポオ文学全体の一部をなして、ポオの神話の各々異った劇化、暗喩化であると云ってよい。

解釈上の一貫した視点の欠如は、従来の研究者達の、ポオの初期の作品に対する偏見に満ちた、誤った見方によるところが多い。ポオの初期の作品は、売込みを狙った、時勢に諂ったものであり、当時の文壇に対する荒唐無稽な諷刺や、笑いを狙った法螺話風の読物であると一般に見られていて、真面目な研究の対象にならないことが多かった。ポオの創作活動が短いことと、「アッシャー家の崩壊」や「壘の中の手記」も含めた多くの傑作が、初期に書かれていることだけをとりてみても、この見方が誤っていることは明白である。

しかしこの偏見はもっと根本的に、欧米の批評家の、グロテスク及びゴシック的要素に対する根深い偏見に由来している。グロテスクは、ルネッサンス期から使われ出した美術用語であり、後期浪漫主義から現代文学にかけて最も発展した概念・様式であるが、形而上学的概念としても、美学上の概念としても、一般に否定的なものとして扱われてきた。ボードレール、ドストエフスキー、カフカ、ベケットといった現代の作家によって、グロテスクの、思想としてまた想像力の一型態としての重要性がゆるぎのないものになる迄、グロテスクは常に、逆説的概念と様

式、気まぐれな想像力の遊び、そして正統に吸収されるべき異端として、即ち否定的媒体としてしか評価される事がなかった。

更に、研究者ばかりではなくアメリカの読者が実に長い間ポオに抱いていた偏見——アルコール中毒患者、麻薬患者、性的倒錯者、精神分裂症患者等々——が、ポオの“グロテスクな”作品を真面目な批評の対象からはずしていた理由の一端でもある。

ポオ自身も、最初の作品集『グロテスクとアラベスク物語』の序で、明らかに批判を意識した弁明をしていて、その弁解がましいグロテスク弁護のために、かえってこの作品集に収められた初期の作品を、何かいかがわしい、胡散臭いものにしてしまった趣もある。しかし何と云っても、浪漫主義文学に於けるグロテスクの重要性に関する無理解こそ、ポオのグロテスクが正当に評価されなかった最大の原因である。

これに反して最近のポオ研究では、ポオの“黒い想像力”に焦点をあて、ポオを実存主義的な不条理の文学の伝統との関連に於てみてゆこうという傾向が顕らかである。この視点にそって、ドストエフスキーやカフカとの関連が注目されはじめた。サルトルのボードレー論やジュネ論に展開される、悪や醜悪さを通しての逆説的超越、即ちグロテスクによる超越の企ての分析は、ポオの主人公のグロテスクなドラマ——疎外からの回復を探索する悲喜劇的ドラマを理解する上で重要な示唆を与えている。

同時にまたガストン・バシエールや、ジョージ・プーレによって展開された夢みる意識の現象学的分析は、最近のポオ研究に強い衝激と深い示唆を与えている。本書も、これらの研究者に

による実存主義「現象学的研究に多くを負っている。

ポオのグロテスクを、分裂した自己意識を超越して再び統一された自己を回復しようとする行為——即ち精神「心理的な力」あるいは意志によって遂行される逆説的な超越の試み——とみる点では、私の視点は実存主義「現象学的視点と同じであるが、それと異なる点は、私がポオのグロテスクを浪漫主義文芸思想の「一型態である」とみている点である。宇宙、自然、そして人間を、原初的統一とそこから疎外という観点で捉え、それらを統合的に説明する独自の神話をつくらうとしたポオの思想は、正統的浪漫主義の思想である。ただポオを前期浪漫主義と区別して、後期浪漫派に属させるものは、他ならぬグロテスクの概念である。またグロテスクこそ、後期浪漫派と実存主義を結びつけるものであったことを考えると、ポオの文学を浪漫主義文学として、同時に、実存主義「現象学的視点から捉えようとする試みは間違っていないように思う。

超越的浪漫主義とグロテスクの緊密な関係は、ポオの「グロテスク」な作品を、「ユリイカ」の神話との関連においてみたとき明らかになってくる。宇宙論でもあり同時にポオの「夢」でもある「ユリイカ」は、グロテスクの起源と機能を説明しているからである。破壊的な笑いや、諷刺の下に隠れた浪漫主義的アイロニーの視点は、悪魔的であり同時に超越主義的な「ユリイカ」の夢を貫く視点である。「ユリイカ」の中でポオは、グロテスクという様式が、ポオの神話——断片化と再統一という神話——を表現するのに適切な様式であること、更に、グロテスクが、ポオの自然観の中心をなす概念であって、破壊を通して蘇生する、疎外からの回復劇の中心概念であることを説明してくれる。

ポオは、コールリッジや、シュレーゲル兄弟をはじめとするドイツ浪漫主義から多くを学び、ヨーロッパとイギリスの浪漫主義文芸の伝統にその文学の拠点を置いている。コールリッジにとっても、シュレーゲルにとっても、グロテスク（アラベスクも含めて）と美、悲劇的と喜劇的、理想的と諷刺的等の矛盾対立と、そのアイロニックな統合は、哲学的にも美学的にも中心課題であった。ポオのグロテスクもコールリッジやシュレーゲルの延長上にあり、現実と夢の間の矛盾を顕示しながら、その逆説的統一を志向するアイロニックな視点を内包している。ポオのグロテスクは、一方では現実を見極めようとする諷刺的想像力であると同時に、理想郷を夢みる超越主義的想像力でもある。「ユリイカ」が、対立概念の逆説的統合を神話の中に体系化しているのに比して、ポオの短編小説は、超越行為の内包するこの二重性自体を、アイロニーの視点から劇化していると言えよう。

ポオのグロテスクはまた、十九世紀に於ける産業都市文明の勃興と、それに伴う自然破壊に対する浪漫主義的反応の一端として検討されるべきである。第一章に於けるポオの自然観の分析は、自然への態度がグロテスクの基本的要素となっていること、そしてグロテスクが根本的には産業機械文明批判であることを明らかにすると思う。ポオ文学を浪漫主義文学として総体的に扱った批評家には、リチャード・ウィルバーやエドワード・デイヴィッドソン等が居るが、両者共「ユリイカ」の神話がポオの作品分析に欠く事の出来ない思想的枠組を提供していると主張している。ヴォルフガング・カイザーと、アーサー・クレイボロウによるグロテスクの研究は、浪漫主義文芸と現代文芸に於けるグロテスクの重要性を、概念の発生過程や、用語の使用の歴史、その意

味の変遷等を辿りながら詳しく立証してくれる。カイザーの『芸術と文学に於けるグロテスク』(The Grottesque in Art and Literature)は、グロテスクの美学を分析した、最も明晰で深い洞察に富んだ研究であろう。私がこの書に多くを学んでいることは言うまでもないが、ただ一つ、私のグロテスク理解がカイザーの見解と異っている点を述べておきたい。カイザーは、慣れ親しんだ日常世界を突如として疎外された不条理な世界に変貌すること、そしてその変貌に立ち合った人間の恐怖を、グロテスクの中心的課題とみるのだが、その変貌を引き起こすグロテスク想像力の機能と目的を、存在の内にひそむ悪魔的な力を表面に引き出し、その上で鎮静するものと定義している。『暗黒の力』は、抑圧されるのではなく、理性によって理解され説明されて、最終的に理性的知性の範疇に還元してしまいうために、解放される。グロテスクは、結局は、邪悪だが、馬鹿気て無害なものでしかない、とカイザーは定義する。カイザーはポオのグロテスクもこの定義をはみ出るものとはみていない。しかしポオのグロテスクは、不条理で悪魔的ではあるが、馬鹿気ていて無害ではなく、理性と文明に対する根本的な批判と挑戦を目的としている。ポオの想像力はグロテスクを解放するが、それを理性的判断によって説明し去るためではなくて(即ち、グロテスクを理性的認識のカテゴリーに還元するためではなく)、理性的認識を否定する真実、あるいは現実の次元を顯示するためである。理性とは対立する本能を解放し、現実を破壊することによって夢の世界へ超越しようとする、理性や文明にとっては有害な想像力である。絶対的な、存在の無を顯示することに於ても、ポオのグロテスクは、二十世紀のグロテスクと同様に、カイザーの定義を大きくはみ出していると思う。ポオのグロテスクは、生の本質として顯

示した無を、超越的夢の世界へ到達する手段として定義する所にその特質がある。

第一章では、ポオの主人公の、宇宙の原初的狀態からの疎外と、それに伴う自然の變化の過程を辿った。「ユリイカ」の神話の分析、そして神話の提出する浪漫主義・超越主義思想と、その思想の、ポオの主人公のドラマに対して持つ意味を検討し、グロテスクとアラベスクの概念の起源を神話の体系の中に跡付けようと試みた。「ユリイカ」と短編小説の分析を通して考察されるポオの自然観は、ポオのグロテスクを理解する鍵となるはずである。第一章の後半では、疎外回復の旅のパターンを追い、疎外状況の暗喩である都市のイメージを分析する。またポオに於ける芸術の意味と、原型的詩人の宿命について考察した。

第二章では、形而上学的、美的概念としてのグロテスクの歴史的発展と変遷を考察し、ポオのグロテスクとアラベスクの定義を試みた。谷間から都市へ、という旅の続きとして、ポオの主人公はゴシック様式の家や部屋といった、小さな空間に自己幽閉する。この自己の意識内への没入は、疎外の結果であると同時に、回復の旅の最終段階でもある。

グロテスク想像力は、地上的現実の荒廃と生の不毛を顕示する破壊的な想像力であり、その過程で、無を体现する無気味な「もの」を表面に引き出して来る。第三章で検討するポオの犯罪者は、その無気味なものに誘惑されて、自己破壊を目ざす純粹悪の世界へ踏み込んで行く。その無償の犯罪行為は、自己意識の統一を目ざす超越行為でもある。犯罪者のグロテスクな超越の企ては、「ユリイカ」の神話の枠組の中に置かれながらも、自己意識の統一を目ざす実存主義的な試みとして分析される。続いてポオの特異な語り手の用い方、そしてその語り手や、ドッベルゲン

ガーを通して表現されるアイロニックな視点を検討した。

第四章では、未知の外界を探索しその無に遭遇するポオの冒険者と、探偵デュバンのドラマを辿った。外界の神秘の探求は、窮極的には夢見る意識の探求であり、象徴的想像を駆っての内的な旅である。ポオの冒険物語は、構成上三つの次元から成立っている。第一は娯楽読物としての冒険物語の次元であり、第二には、理性と想像力の対立のアレゴリー、即ち、神話の劇化の次元である。第三には、深層心理、無意識領域への下降という内的な旅の次元である。これらの異った意味の次元を内包しながら、ポオの冒険は、「ユリイカ」の宇宙的原初の意識への帰還の旅であると言える。

最終章では、自らの夢の工房、アラベスクなアトリエを創るポオの芸術家を考察する。アラベスクで怪奇な装飾でかざられたこの部屋は、そこに住む人の日常感覚を破壊し、そのファンタズマゴリックな効果によって、夢見る意識を喚起する。

現実の超越をめざすポオの主人公達は、この様に本能の領域に深く踏み込んでゆく。感覚的陶醉のうちに得られる意識の高揚は、外界と内界の境を破り、ポオの主人公は、自らを宇宙の創造主であり、宇宙の意識そのものであると感知する。しかしこの時ポオの主人公はすでに狂人であり、自己破壊への道に深く踏み込んでいるのである。意識の統一は、このように自己破壊を通してのみ得られるものであり、自己破壊の恐怖は、超越への浄化の過程であると言える。ポオの超越は、結局は意識の変革に他ならず、視点の極端な内面化によってもたらされる、夢見る意識の無限の飛翔に他ならない。

第一章 ポオの自然観

死の一年前に、「ユリイカ——物質的、精神的宇宙に関するエッセイ」(Eureka: An Essay on the Material and Spiritual Universe)を書き終えた時、ポオは、あたかも自らの近づく死を予感していたかのようにであった。ポオは当時、身体的にも精神的にも衰弱の極みにいたばかりでなく、「ユリイカ」を書き終えた時、一生の仕事、即ち自分の文学的探求の総てをまとめる最終的な作品を書きあげたと感じていたらしかった。一八四九年、ポオは義母であるマリア・クレム夫人にこう書きつづった。

私はひどい病気を患っています。コレラかあるいはひきつけのように悪質なもので、筆を持つこともほとんど出来ません。この手紙を受け取り次第すぐ来て下さい。お目にかかれるうれしさで、私の悲しみも少しはやわらぐでしょう。一緒に死ぬほかないのです。説得しようとな